



握り飯と水

エプロン通信員 藤井 真人

沖縄で暮らし始めて十年近くになりますが、先日はじめて旧日本軍のトーチカを見る機会がありました。トーチカとは前後左右のみならず天井まで防御された砲座（銃座）のことです。トーチカのある嘉数高台公園は先の戦争の折、眼下に群がる米軍と激しい戦いがくりひろげられたと聞きます。狭い入り口から無理やり入り込むと、ぶ厚いコンクリートに外の音はさえぎられ、ひんやりした静かな空間が広がっていました。クワガタ採りでよく知っているつもりだったこの公園での意外なできごとでした。

戦後六十四年が過ぎ、ふと気がつく直接の戦争体験を話せる人が少なくなりました。とりわけ当時すでおとなだった人の話はなかなか聞く機会がありません。教科書などで習う大局としての歴史、史跡や当時の映像などのモノ。さらに体験者の細かな記憶は他の方法で代えがたいリアリティがあります。

私が学生の頃の夏、旅先で忘れられない出来事がありました。本土の小さな島の古い神社でぼんやりたらずんでいたときのことです。後ろからざくざく砂利を踏む音が近づいてきて、振り向くとひとりの宮司が立っていました。小柄でしわだらけのその人は、私の顔

を見るなり何の前置きもなく、自分は毎年八月十五日の前の一週間ばかりを握り飯と水だけで過ごすのだという意味のことを言いました。いぶかしむ私に「自分は南洋群島に送られて大変に苦しい思いをした。仲間の多くは飢餓で苦しんだあげく島で死に、自分は幸いにも生き残った。彼らのことを、あのとときの思いを忘れないためにそうしている」と続きました。

他者の経験を自分のものにできるかどうか。わたしたちのこれからはこれに尽きるのではないか。それは言うまでもなく、社会の共有の知恵を殖やす作業だと思えます。当時を知る人がやがていなくなつたあと、慰霊の日が単なる歴史的な記念日になってしまふのか、それともそうではないのか。そろそろその境目に差し掛かっているような気がします。この夏、いくさ世を生きた自分につながる人のことばを聴いてみませんか。



茶

ぐわーゆんたく

62

宜野湾を貫く米軍の道路

国道五八号と並行して宜野湾を南北に貫く道路に、通称「パイプライン通り」があります。この道路は現在、県道として整備されていますが、戦後は基地と同様に米軍の管理下にありました。

パイプラインは、米軍の陸軍貯油施設の一部です。一九五二（昭和二十七年）年、那覇から読谷まで燃料を送油する管三本がむき出しの状態で敷設されました。パイプの敷かれた道路は、たとえ悪路でも軍用地のため、整備することでも出来ませんでした。

さらに、この道は人びとの生活に大きな影響を与えました。敷設以来、パイプの腐食によるガソリン流出事故が多発。宜野湾市では一九六八（昭和四十三）年一月四日、伊佐でガソリン流出事故が起きました。農地・生活用水を汚染し、農作物が全滅する甚大な被害がでました。また、パイプ点検のために設置させたバルブポツ

クスが障害となり、交通事故も多発しました。

沖縄が本土復帰すると、パイプラインも徐々に返還が始まり、宜野湾市では一九九〇（平成二）年十二月、嘉数-伊佐間の返還が始まり、バルブポツクスも撤去されました。今では「パイプライン通り」という名称と喜友名にある標識だけがパイプラインがあったことを物語っています。



▲ 今も残るパイプラインの標識(喜友名)

『宜野湾市史』への問い合わせ

教育委員会文化課

☎ 八九三-四四三〇